

## 河内平野の古地理

文學士 小 牧 繁 實

太古草昧の世淀川が屢々氾濫して河内平野を掃蕩したらう事は仁徳十一年茨田堤を築いたと云ふ書紀の記事以下多くの同種の記事より想像せらるる所であり、其の水平野を南下し舊大和川の邊りに至つたらう事は平野の地形より想像せらるる所であるが、更に淀川本流若しくは一支が枚方附近より南流河内平野を南下、舊大和川と合流し此所に現今の淀、木津、桂諸川の合流點附近に巨椋池を湛ふる如く一大沼池を湛へ其の水西流して大阪灣に注いだものかどの想像も歴史的記事よりする湖推地形上よりする推測によつて歴史地理的自然地理的兩方面より必ずしも架空ならざる想像として許さるる所である。

然るに最近に至り斯かる想像の外に尙時代を溯れば古淀川若しくは其の一支と古大和川との合流點附近の池沼は嘗て巨椋池と相連絡し一大湖水を形成せるに非ざるかとの想像も許さるるに至つた。其は河内國中河内郡孔舎衛村日下貝塚發見調査の結果である。以下河内平野の歴史地理的先史地理的考察を試み以て其の然る所以を明かにし度いと思ふ。

河内國日下貝塚の發見は同國額田在住八木博氏のなされた所で全く氏の熱心に負ふ所である。其の顛末は同貝塚の考古學的考察と共に近く同氏によつて考古學雜誌上に發表せらるる筈であるから茲に亦贅せぬが其の發見が大正十五年十月七日大

阪毎日新聞紙上に報せらるるや考古學教室島田貞彦末永雅雄兩氏考古學專攻の水野清一地理學專攻の廣瀬淨憲岡本重彦諸氏及び余は同月十日氏の東道を乞うて日下を訪れ親しく現場を踏査し、同地河澄泰藏氏の好意により小發掘を試み貝殼獸骨土器破片等多少の遺物を得又二子岩製石鏃數箇を表面採集して該貝塚の石器時代貝塚なる事を確めたのである。

其の正確なる位置を示さんに遺跡は河内國中河内郡孔舎衙村大字日下聚落より西方布市聚落に通ずる道路の南北兩側に互り同聚落北西の一池と南方の小河流との間に挿まり、之れを地形上より云へば生駒山斷層崖(註一)下に該小河流の形成せる扇狀沖積地が大坂平野地盤の隆起と共に同河流に解析せられ南方河身に向つて傾斜せる斜面の上部即ち北は池西は扇狀沖積地の自然的斜面南は河川の解析斜面に續く沖積台地の一端、海面上の高度

二十乃至二十五米の地點に存するのである。

此地發見の遺物に就いては幸島田氏が近く人類學雜誌上に報告せられる筈であるから凡て其れに讓る事とするが發見の貝類に就いては特に其の記載を必要とする。否貝類の記載なくしては本論は之れより一步も進む事を得ないのである。

本貝塚に於いて余等の注意採集せるものに就き理學部地質學教室黒田德米氏の鑑定を煩はせる處によれば本貝塚發見の貝類は左の數種である。

- Hyriopsis schlegelii* v. Martens. イケクワンガイヒ  
*Corbicula sandai* Reinhardt (Var.) セタジガイヒ  
*Viviparus japonicus* v. Martens. オホタニシ  
*Semimuscospira reiniana* Brot. サラメンカハニナ  
*Ostrea gigas* Thunders. カキ  
*Dosinia japonica* Reeve カハミガイヒ  
*Meretrix meretrix* Linné. ハマヅクリ

*Saxidomus purpuratus* Sowerby. ウナムラサキ  
*Thais (Mancinella) bronni* Dunker. レインシガヒ

以上數種の中、カキ、ハマグリ、ウナムラサキ、レイシガヒ、カシミガヒの五種は鹹水産であるが他の四種は淡水産である。此は先づ注意すべき事實である。

而して更に注意すべきは以上の諸種が凡て同量に發見せられたるに非ざる事實である。實際海水産の五種、及びセタシヅミを除く淡水産の三種の發見は千に一二であつて僅かに其の痕跡を認め得るに止まり深甚の注意を以てせざれば其の採集困難なるの程度であつて發見貝殻の大部分は蜆貝殻である。即ち此の事實を以てすれば本貝塚は正に蜆貝塚である。

余等は採集せる貝殻の鑑定を俟つ間本遺跡が正しく貝塚であつて其の點に於いて近畿に稀なる特

殊の遺跡たるを認め甚だ重要視したのであるが黒田氏の鑑定を俟つて其の蜆貝塚なるを知るに及んで該貝塚が二重の重要な意義を有すを覺つたのであつて茲に深く黒田氏に謝せなければならぬ。

黒田氏によれば、本貝塚發見の蜆貝は其の形態甚だ大なるもので之は琵琶湖、巨椋池、淀木津兩川以外には存在しない、恐らく何れかの時期琵琶湖より通れ出でたるものであらう、何れにするも斯かる大形種の成育には可なりの水深と水量とを要するものであるから之れが普通の小川より獲得せられたとは考へられぬ、其の成育には湖水に非んば巨椋の如き一大池沼の存在を想像しなければならぬ、この事である。余は此の貝類學の權威を信するものであり、又其の推定を信するものである。

然らば日下貝塚貝層の大部分を形成する該蜆貝は果して何處より獲得せられたものであらうか。

余は此は日下より然かく遠隔ならざる地點より獲得せられたものであると思考する。何となれば貝層は所により可なり厚く深さ一尺餘に達する箇所あり蜆貝が此地住民の重要な食料品の一部をなした事想像に難くないのであるが其れが遠隔より齎され食用に供せられたとなすは稍不自然で寧ろ附近に於いて獲得せられたものと考ふべきであるからである。

而して余は石器時代日下附近に稍廣大なる淡水池沼の存在を想像するものである。其は先づ地形上より許さるべき想像である。即ち大和川は舊時河内國々府附近より北流、平野を北上して日下附近に來り之れより西流したる事歴史上に明かであり、又淀川は枚方附近より南流、平野を南下、日下附近に於いて大和川に合流せるものと推定せられるから該舊合流點附近に石器時代一大沼池の存在を想像するも其は決して單なる架空の謬想とな

す事は出来ない。

而して此は又歴史的事實よりも推定せらるる所である。即ち寶永以前の地圖紀行名所記等には明かに此の地に深野池なる池沼が現はれて居るのであつて之れより石器時代に於ける一大池沼の存在を推定し得るのである。享和元年辛酉歲（一八〇一年）冬十一月刊河内名所圖會後篇下（卷之六）には「深野池　むかし野崎村の管内にあり封境廣大なり今埋て田園となる深野新田これなり」とあり此頃は深野池は既に寶永の大和川改修のため乾拓せられて深野新田となつて居たが、正徳三年癸巳（一七一三年）刊行益軒貝原先生著諸州巡覽記（諸州めぐり）卷之三南遊紀行卷之上には「此所に楠正行正時兄弟の墓あり（中略）飯盛山の麓の西也是ふかうの池の北の側にあり此邊茨田郡順和名抄に茨田は萬牟田とかけり　ふかうの池は深野池とかくと云本名は茨田池と云池の廣さ南北貳里東西

壹里所により東西半里許有湖に似たり其中に島あり三ヶと云村有故に此池を三ヶのおき共云三ヶの島に漁家七八十戸あり田島も有此島南北廿町東西五六町有と云此池に鯉鮒鱸はすわたかるひ鰻鱺つかに等多し漁舟多し日々舟に乗て漁し魚を大坂にうる又蓮多し莖實多く葦多し皆取用てたすけとす殊に菱尤多し是を採て飯にし饊にし粥にして糧とす或菓子にもする又賣て資とす菱を取日は定日あり里民云合せて群出一人にて妄に取事を禁す菱に賦税はなし又此島より漁人共舟にのり陸に渡りて田をも作なり 御供村は池の東に在嶋にはあらず漁人多しふかうの池のまはり凡四十二村ありと云此池水の流れの末大和河に出つ河下より商舟毎日往來す是より大坂へ二里あり、榎並八箇と云處はふかうの池の西北にあり大郷なり村數多し山の根道の側にはあらず枚方に近し、内助か淵は大池なりふかうの池の西南にありふかうか池とは別也方

八町ばかり有蓮多く魚多し三ヶより漁人行て採る又其邊にも漁家少あり是又山根の大道には少へたたれり」とあり、又、延寶七年己未(一六七九年)刊行の繪入河内鑑名所記(河内國名所鑑、河内名所記)卷五には「深野池、大きな池なり」とあり、尙、吉田東伍博士によれば更に約三十年を溯れる正保の河内國圖には深野池を載せて居るとの事であつて寶永の大和川改修以前に於いては現在の深野の地に未だ大なる池沼の存在せる事を知るのであるから石器時代此所日下附近に稍廣大なる池沼の存在を想像する事は決して不當ではない。此の池が淀川若しくは其の一支と大和川との合流點附近に存在せるものなりや否やは今暫らく措くも兎も角日下附近の地に元祿の頃まで一池沼の存在せる事は争ふ可からざる事實であるから先史時代此所に恐らく之れより更に大なる一池沼の存在せしならん事は當然許さるべき想像である。

然らば先史時代日下附近の該池沼は如何なる情態にあつたであらうか。之に就ては順序として先づ歴史時代に於ける該池沼の情態を考へ之れより更に史前の情態を推測するを以て可なりとする。

深野池附近の地理に關する南遊紀行の記事は幸甚だ詳細であつて日下附近の歴史地理的考察上好個の參考材料を供し該池沼の復原に幾多の手懸りを與ふるものであるが殊に益軒が此の地を旅行したのが元祿二年（一六八九年）（註二）即ち大和川改修工事の成れる寶永元年（一七〇四年）を距る僅かに十五年前で南遊紀行の刊行せられた正徳三年には既に大和川は河道を變じ深野池は乾拓せられて新田となつて居た程であつて該記事が大和川改修直前に於ける深野池の情態を描寫し永く之れが存在を記念せるは甚だ興味ある所で斯かる見地よりすれば南遊紀行の該記事は此地の歴史地理的考察上甚だ重要な參考材料であると云はなければならぬ。

らぬ。

兎も角該記事は卷首にも記す如く彼れが元祿二年京師を出で山城河内和泉紀伊大和五州の内往來のみちすちを記したものであるから其の云ふ所は大體信用して不可なく之れより當時の深野池附近の情態を想像し得るのであるが圖に示せる南遊紀行中の簡單なる鳥瞰圖式挿圖は甚だ明瞭に當時の地形の輪廓を示すものと云はなければならぬ。

然しながら斯かる鳥瞰圖により更に議論を進める事は甚だ非科學的であるから之れは單なる挿圖として見るに止むべく吾人は寧ろ陸地測量部二萬分一地形圖上に於いて絶えず地形に對する注意を拂ひつゝ南遊紀行の記事を以て深野池附近の地形水理を復原し以て當時の池の情態を察すべきである。

斯かる池沼は之れを自然の情態に放置すれば、砂礫泥土の沈積、蘆荻水藻の茂生によつて次第に

埋没する事湖沼學上の事實であつて多くの湖沼は時代を溯るに従ひ次第に其の面積深度大であつた筈であるから深野池其の他の池沼は時代を溯るに

草香江は大阪灣の直接の灣入所であつたとも考へられぬ事はない。河内平野が大阪灣底より干上る過程に於いて斯かる時代、時期若しくは瞬間があつた事は勿論であるが所謂久佐迦延若しくは草香江は斯かるものとは考へざるを可とする。それは日下蜆貝塚發見の事實にチエツクせられるからである。

從ひ當時に於けるより面積深度共に大であつたと考へなければならぬ。古事記に所謂久佐迦延(註三) 萬葉集に所謂草香江(註四)は假令全くの歌枕であるにしても其の久佐迦延若しくは草香江の實物は恐らく此の池の前身たる廣大なる江であつたらうと思はれる。



であつたらうと思はれる。

に流入し然る後西流した水面であつたと考ふべきものの如くである。何れにするも瀬戸内より大和

所謂久佐迦延若しくは草香江は古大和川が一旦此所

に至る交通の要樞に當れる事明かで瀬戸内より大和に入らんとするものは難波に至り舟を溯らせて草香の江に入り之れより舟を棄て坂路生駒を越え大和に入る事を得又更に舟行を續けて川を溯り國府附近の地に至り之より川に沿ひ大和に入る事も得たと考へられるのであつて、斯くの如く當時の地理を考ふるならば書紀に所謂草香邑青雲白肩(盾)之津若しくは草香津、盾津若しくは蓼津(註五)古事記に所謂青雲之白肩(盾)津、楯津若しくは日下之蓼津(註六)を現今の日下附近に求め又日下之直越道若しくは直超(註七)を日下より坂路大和に至る捷路と解する見解も甚だ正鵠を射たるものと云はなければならず、上古日下が日本の交通の要衝に當れる事を認めなければならぬ。

兎も角太古日下附近に廣大なる池沼の存在せるならん事は推測に難からぬ所である。更に時代を溯り石器時代に於いて該池沼が更に廣大なる面積

に互れる事は理論上當に然るべき所である。大和川河流の水量を容れ可なりの水量を湛へ水深も大なりしならん事は充分推測し得る所である。然らば日下貝塚人の食料に供せる蜆貝が該池沼より獲得せられたるものならんと解して何等不可なく日下貝塚貝層の大部分を占むるサンダイ蜆貝が日下附近の古草香江即ち舊深野池より獲られたるものならん事は最早や疑ふの餘地を存しない。

然らば琵琶湖巨椋池木津淀兩川のみに特産する該蜆貝が如何にして此處日下の入江に産せらるるか。此は現在の知識を以てすれば此等兩地が或る時期水面により相連絡せる事實を想像せざる以上解釋不可能である。

即ち先史時代の或る時期琵琶湖巨椋池木津淀兩川舊深野池は水面により相連絡せりと考へなければならぬ。琵琶湖巨椋池は淀川本流を以て巨椋池深野池は淀川本流若しくは淀川本流の一部及び其



の一分派を以て若しくは一湖水をなして相連絡し斯かる水面の連絡によつて琵琶湖巨椋池に特有なる大形種蜆貝が此所深野池まで移動し來り繁殖せるものと解しなければならぬ。石器時代に於ける蜆の人工的養殖は一寸考へられない所であり又之れを巨椋より獲得し來れるものとすれば何故に比較的近接地に獲られたりと考ふべきカキハマグリ等の貝殻の發見が寥々たるに對して比較的遠隔地の巨椋池産蜆貝が斯くも多量に發見せらるるかとの矛盾を生ずるからである。

琵琶湖巨椋池間の關係は餘りに明白であつて茲に何等贅言の要を見ないから結局巨椋池日下江間の關係が問題となるのであるが、之れは巨椋池日下江の兩者が近畿の石器時代若しくは其れ以前、(但し洪積期以後なる事は明白である)一の湖水をなせりと考ふれば甚だ簡單であり、又斯く考へないにしても巨椋を出でたる淀川が南西流して枚方

附近に至り之れより南流河内平野を南下し日下江に入れるならん事は地形上より充分推測し得るのみならず又仁徳十一年茨田堤を築いたとの書紀の記事疹子斷間の傳説以下多くの同種の記事が明かに之れを暗示するのであつて、疹子斷間の遺跡たる太間より古川筋を経て深野池西方に至る舊河道を想定する事は最も容易である以外に枚方附近より寢屋川筋により深野池に至る、及び太間より同様寢屋川筋により深野池に至る他の舊河道も又容易に想定し得る所であるから巨椋池日下江間の關係を着くる事は必ずしも困難ではない。琵琶湖巨椋池木津淀兩川以外に産せざるサンダイ蜆貝を此所日下貝塚より發見する一見不可思議なる事實の解釋は斯くの如く考ふれば必ずしも全く不可能ではない。

恐らく最も早き時代に於いては巨椋池日下江は山崎水門に於いて溢れたる一の連絡せる湖水を形

成して居たものの如く此の時期日下貝塚發見蜆貝の祖は琵琶湖巨椋池方面より此所日下附近に移動し來り、其の後兩者は漸く相分離するに至つたが尙能く一道の水脈を以て相連絡して居たものと思はれる。

斯くして貝塚築成時代に於ける日下貝塚の地理を考ふるに當時日下江巨椋池は既に相分離して一湖水はなさなかつたであらうが兩池沼は尙一道の水脈によつて相連絡したかと思はれ若し假りに既に連絡を絶つて獨立せる二個の池沼であつたにしても日下江が古大和川と連絡して居た事は明かであり下は其の地瀬戸内より大阪灣頭難波の地を過ぎ舟により古大和川（淀川）古大和川であつたかも知れぬ事前述の如し）を溯り舊深野池即ち舊草香江により到達すべく、之れより尙舟により大和川を溯つて河内國府の地に至り然る後大和に入るべく又此所に舟を棄て直ちに日下直越により生駒を

越して大和に入るべき交通上誠に重要な地點に存したのであつて該貝塚人が如何なる種族に屬せしかは我邦史前の植民を想像する上に甚だ重要なもので切に今後に於ける人骨の發見を祈り又考古學者人類學者歴史家の共同研究を冀望する所であるが余は試みに貝塚住民居住の舞臺たる日下の先史地理殊に其の大局より見たる地理を考へたのである。尙余は其局部の地理即ち例へば花崗岩よりなる生駒溪間に出づる澗流が貝塚南縁を流過し飲料の便を與へたと思はるる如き、或ひは二子山形成の岩石と同質の讚岐岩 (Granite) 岩脈が日下南東の局部に露出して石鏃（發見の石鏃數個共凡て此の岩石を以て作られて居る）其の他の石器製作に有利なる材料を供給したと思はれる如き二三の事實に注意したのであるが本論は素河内平野の一般的古地理を考へるのが主目的であつたから之れに就いては今多く言及しない事とする。

終りに本論文を草するに當り文學士伏見義夫氏の所説(註八)を參看した所が多い。記して感謝の意を表する。(一九二六・十一・二七)

註一 樺山次郎 生駒山脈生成論 地球 第六卷第二號 大正十五年八月一日

註二 南遊紀行卷之上「山城河内和泉紀伊大和すべて五州の内往來のみらずちを記す 元祿二年京より南方にゆかんとて二月十日東洞院の舍を出」

註三 古事記朝倉宮上卷 引田部赤猪子歌 久佐迦延能伊理 延能波知須波那婆知須微能佐加理毘登登母志岐呂加母

註四 萬葉集卷四 草香江之入江二求食蘇鶴乃痛多豆多頭思 友無二指天

註五 日本書紀卷第三 遡流而上徑至河内國草香邑青雲白肩之津(中略)却至草香津植盾而爲雄詭焉因改號其津曰盾津 今云蓼津訛也

註六 古事記白檮原宮上卷 故從其國上行之時經浪速之渡而泊青雲之白肩津此時登美能那賀須泥昆古興軍待向以戰爾取所入御船之楫而下立故號其地謂楫津於今者云日下之蓼津也

註七 古事記 朝倉宮上卷 初大后坐日下之時自日下之直越道幸行河内 萬葉集卷六 直超乃此徑爾師且抑照哉難波乃海跡名附家良思蒙

註八 伏見義夫 淀川の河道の變遷 歴史と地理 第十三卷 第一號 大正十三年一月 同氏 卒業論文(原稿)

# 日明貿易の發展につきて(上)

文學博士 三 浦 周 行

## 一 栢原氏の時代區分批判

足利時代に日明間の外交に託して行はれた貿易

の發展を叙するに當つて、私はこれを三期に區分するを例として居る。第一期は義滿の時代であつ